


彼女の裸体をマッサージしながら思わず笑みが漏れてしまう
(応募して正解だったなあ)

『拘束マッサージ』なる如何わしい仕事のアルバイト募集を受け
女装しながらオバサンや老婆の相手をしている毎日に
彼女のような若い女子が来ることは滅多に無い
(きつと神様からのご褒美に違いない)

少し照れくさそうにしながらも気持ちよさそうにマッサージを
受ける彼女に、実は見覚えがあった
(間違いない、となりクラスの女子だな)
ギャル子とかあだ名を付けられていた割と男子人気のある子だ





「それでは、準備がおわりましたので始めますね」
名残惜しい気持ちを抑え、マッサージを止めて準備する
(まさかスペシャルコース希望だったとはな)
一部の主婦層に人気のある股間専門のマッサージだが
快樂絶頂を目的としたコースなので利用客が限定される
(早く始めないと時間が勿体ない)
彼女の秘所を思うようにできるなんて
想像だけでも興奮してしまう

「美容に良いと聞いたので、ちょっと恥ずかしいけどお願いします」
少し照れ笑いしながらも、緊張した様子などはあまり見られない
(それなら遠慮なく始めるとしよう)
こちらの震えは悟られないよう、ゆっくりと手を伸ばしていく

ショーツの上からでも分かるぐらい特徴のあるクリトリスだ
(大きい、それに張りが違う…)

経験した主婦のオバサンとは比べられないくらいの巨クリだ
布越しの触り心地良いクリトリスを撫で回して遊ぶと

「やっぱり私の、大きいでしょうか？」

自分のを弄られた感想を素直に聞いてくる

「そうですね、大きいのを気にする女性もいますが

このサイズでしたら、許容範囲だと思いますよ？」

どうやら大きいのを気にして聞いてきたらしいので

彼女の気持ちを傷つけないように対応した

「それでは失礼いたします」

ショーツに空けてあるマジックテープ付きの窓を広げると
飛び出すように大きいクリトリスが覗き出てくる

「おおっ！」

思わず感嘆の声を漏らしてしまうぐらい、見事な巨クリだった
(想像よりデカく、とっても綺麗だ…)

胸のドキドキを感じながら、しばらく見惚れてしまった

初めて他人に自分の恥ずかしい所を見られたのだろう

「は、恥ずかしいかもお…」

ギリギリ聞き取れるかぐらいの小声が漏れ出している

(なんて可愛い仕草、めっちゃ興奮する…)

「直に触らせていただきます」

「……」
「んっ……」

返事を待たず、指先をゆっくり巨クリへと近づけてみると

これまでの経験した事の無い触り心地に脳が痺れる

(なんだこれは、滅茶苦茶エロい、エロ過ぎる……)

クニクニと弄ってみると、中にやや固い芯があるのが分かる

(自分のと同じだ……)

しばらく確認するように包皮を弄ったりすると

それに応じて芯の固さが増してくるのが分かった

「ふう……っ……」

僅かながら、彼女も吐息を漏らし始めている

この感動を、もうしばらく味わっていたいが
あくまでマッサージの処置をする為の準備だ

「包皮の中は角質の汚れが溜まりやすい箇所ですので
処置をさせていただきますね」

告げ終わると同時に、覆われた包皮をゆっくりと剥き始める

「あっ…」

突然の行為に腰が少しだけ浮き上がり、お尻が逃げる

「恥ずかしがらないでも、大丈夫ですからね」

少し戸惑いを見せつつ、しばらくすると腰の力が落ちてくる

どうやら何をされるのか理解しながらも、落ち着いてくれたらしい

(こんな楽しい事ができるなんて、神様ありがとう)



じっくり楽しみながら、包皮を捲っていくと

ついに大きく膨れたクリトリスがプリッと飛び出てくれた

「やあんっ…」

敏感な場所が突然さらけ出され、彼女の秘所が少し震えて答える

勃起したクリトリスなどは、呼吸に併せ上下へと蠢き続けていた

「な、なんて素晴らしい…」

初めて見る光景に、思わず本音が漏れてしまった

「超はずかしいい…」

彼女も少しだけ後悔しているようで、涙目になっている

(でも、しっかり気持ち良くはなれてるんだな)

広がりつつあるショーツのシミがまた良い感じだ

逸る気持ちを押さえながら、包皮を外側へと限界まで捲り
巨クリのカリ部分がハッキリ見えるぐらいまで、剥き上げてしまう

「あつ、あのっ、少し不安が…」

「ご安心ください。コリやムクレだけでなく

汚れやシミ対策になりますし、不感症もなくなります」

「……」

「ご不満になるお客様はいらっしゃいませんが


最後まで行いますと、皆さま喜んで帰られますよ」

「そ、そうですか……」

会話を続けているうちに、だいぶ気持ちの整理がついたようで

「恥ずかしいけど、悩みでもあったので我慢します」

どうやら前向きに考えてくれたようだ



「それでは、オイルを塗らせていただきます」
指先へタップリと塗り付けたオイルを巨クリへと忍ばせると
上下へとマッサージするように動かす

「や、優しくお願いします…」

見た目以上に初心な反応を見せてくれて、とても可愛い
(しっかり気持ち良くしてあげるからね)

(ぬりぬりぬりぬりっ…)

メンソール効果だけでなく、経験豊富なご婦人達も参ってしまう程の
媚薬効果抜群のオイルを念入りに塗りたくっていくと
弄っている指先にヒクヒク動く巨クリの振動が伝わってくる

初めは少し余裕のある様子で愛撫を受けていた彼女も次第に顔の紅潮具合が増して、呼吸が速くなってきている（気持ちいいのだろうに、必死に耐えている）

「ふう…ふう…」

されるがままになってしまっている自分の巨クリを眺めながら声を出さないよう我慢している表情が、何とも健気だ

（こんな可愛い子の相手ができるなんて幸せだ）

愛いらしく耐えている姿に感動しながら、期待に込めてあげようと巨クリの根本に責めるポイントを移動させると瞬く間にショーツからジットリと愛液が溢れ出し濡らしていく

(このままイかせてあげてもいいんだけどね…)

しっかりオイルが塗り込まれたのを確認すると愛撫を止めてあげる

「ふう…ふう…はあ…」

盛った猫のように呼吸を乱しながら

開放された巨クリを眺めながら安堵の様子を見せる

耐え抜いたという達成感だろうか？

思ったより余裕は無かったのかもしれない

(まだまだ、これからが本番ですよ)

これからもっとすごい快楽に襲われる彼女を想像し

自分の興奮が抑えられないほど猛ってくるのを股間に感じた

(どれだけ乱れてくれるか楽しみ…)



「それでは準備ができましたので、失礼します」

引き出しからクリ用オナホールを取り出すと、オイルを塗り付ける

「えっ、それは…」

見慣れぬ道具に戸惑う彼女を落ち着かせるよう、優しく説明する

「女性用のホールです。とても良く角質汚れが取れるんですよ」

そう説明しながら巨クリの先へと入口を付けてしまう

(彼女のサイズならギリギリ入るはずだ)

穴の直径と巨クリのサイズを確認し終わると、ゆっくり啜り始める

「えっ…えっ…やあん…」

ジェル状の中身を巨クリに感じながら、戸惑いを見せた



「大丈夫ですよ。始めはゆっくり動かしますから」
「は、はいっ…」

なれないうちは強引に動かしても快樂は得られない
ご婦人達から学んだ経験を糧に、少しずつこの感触を
彼女に覚えてもらおうと、浅く動かした

(じゅぽっ…じゅぽっ…ぐちゅ…)
卑猥な音だけが室内に鳴り響いていた

「はあ…はあ…はあ…」

しばらくするとだいぶ感触になれてきたのだろうか
可愛いお尻がモジモジと動いて、オナホルルの動きに乱れ始めていた
(エッチな体してるんだな、予想より慣れるの全然早いし)



よい頃合いだと判断して、オナホールを入口まで一旦戻したら
「きゃあああっ！」

ズンと奥深くまで突き入れてしまう

「あっ…あっ…あっ…」

根本まで到達する急な快感に、彼女の肉体が弓形に仰け反り悶える
(どう？気持ちいいでしょ？)

彼女の反応に満足しながら、オナホールを動かし続けた

「だ、ダメっ…す、すごいっ…」

恥ずかしさより快感に従順なのか、正直な感想が漏れ出てくる
(これを味わったら、もう逃げられないよね…)
弄ぶように巨クリを責め、肉体をじっくり虐めていく

「声は出されても大丈夫ですから、我慢しないでくださいね」
「あっ…イヤあ…こんな擦られて…私っ…」
体を起こし直すと、食い入るように自分の巨クリを眺めている
グチャグチャとした音と共に、乱暴に扱われている姿を見て
さらに興奮して感じているようだ

(よかった夢中になって、気持ちよさそう…)

しばらく快感に酔いしれていた彼女だったが

どうやら限界が近かったのだろう、下半身が痙攣し始める

「いっ…イキそう…イクっ…」

自分の状況を必死に訴えてくれるのが、また愛らしい

(でも、ここでゴールはさせてあげられないんだ)

盛り上がったってきた彼女を尻目にオナホールを抜いてしまう

「あっ…」

すると突然夢から覚めてしまったかのように現実に戻ってくる彼女

自分を酔わせていた刺激を名残惜しそうにオナホールを見つめていた

「オイルとオナホールの交換をしますね」

適当な嘘について間をを挟む

「処置はいかがでしょうか？」

「あ、あの… その… とても気持ち良いです…」

その素振りからは、最初にあった不安や不信などが完全に消えていた
快感が完全に上回って、彼女を虜にしているのに笑みが零れる

「それでは、少し失礼しますね」

そう伝えると、彼女の肉厚な秘所を両腕で開いて覗かせてもらう
絶頂寸前まで行っただけあって、膣口のヒクつき具合がすごかった

「あ、あの…これは何を…」

さすがに好奇心から見てみたかっただけとは言えず、適当に誤魔化す
「膣の収縮具合がお客様の場合、分かりづらいので
少し見させていただけませんか…」

「そうなんですか…」

「なるべく絶頂を我慢された方が美容効果が高まりますので
私の方で、調整させていただくのですが…
そうです、良い方法を思いつきました」



すばやく棚からテープを取り出すと、彼女の許可を得る事も無く
大陰茎が開くようテープで固定してしまう

(すごい光景、エロ過ぎだろ…)

あまりの行為に不満が出るかと思っただが、以外に何事も無く
彼女はすんなりと受け入れている

モジモジして続きが待ち遠しいのだろうか？

(適当に誤魔化そうとしただけに、すごくラッキー)

さらに恥ずかしい格好へと、彼女を誘導できた事に満足しつつ
自分の新たな欲求を満たすかのようになり、事を運んでいく
(もっともっと、恥ずかしい姿を見せてくれよ)



(ついでに、ちょっとだけ楽しませてもらおうかな)

棚からピンポイントローターを取り出すと、スイッチを入れて近づける
「それでは処置の続きをする前に、収縮の確認をしますので
どうかリラックスされていくくださいね」

「それって…振動の…」

彼女も多少の知識があるらしく、さすがにローターは知ってるようで
触れる前から巨クリがヒクヒクと動いて歓迎されてるみたいだ

触れるか、触れないかぐらいの距離でウロウロさせて焦らしてみると
膣口がパクパクと開閉を繰り返し、何とも淫らな光景だ
(こんな可愛い子で童貞卒業できたらいいのになあ)
すでに限界を超えて膨らんだ股間が、本当に辛くてもどかしい

「うわあ…あああつ…」

ローターの威力は靦面で、接触と同時にすぐに効果が現れ始めた
痙攣し続ける巨クリに、膣口の収縮がヒクンツヒクンツと繰り返され
蘇ってきた刺激と快感に、忽ちウツトリとした表情へと変わってくる

「気持ちいい…これも凄いっ…」


ローターの性能に感嘆の声で堪えて、快楽を貪る

(喜んでくれてるようで、やって正解かも)

「気持ち良過ぎて…こんなの初めてでっ…」

はあ…はあ… あんまり長くもたないかもです…」

しばらく行為を続けようと考えていたが、彼女の感度が高いのか
それともイキやすい体質なのか、すでに絶頂が近そうだった



しばらく刺激を送り続けるが、絶頂させては勿体ないので
「大体分かりましたので、ホールでの処置に戻らせてもらいますね」
良い感じのタイミングで止めてあげると、何とも切なそうな表情をする
「はあ…はあ…はあ…」
あくまでマッサージという名目で刺激を受けているので
本当はイきたい気持ちも高まっているのだろうが
簡単に果てさせてしまっっては面白くない

それでもローターの味わいはだいぶ良かったらしく
繰り返し責められ続けていた秘所からは、止め処なく愛液が溢れ
すでにショーツも透けてグツシヨリ濡らし、役にたっていない
(気に入ったようなら、最後はこれでフィニッシュさせてあげよう)

快感の高まりが冷まさないうちにホールをセットし直すと
すでにギンギンと勃起している巨クリへと出し入れを再開させる
「あつくうっ… んんっ！ はあ… はあ…」
「やっぱり、こっちも凄いのお… 吸い付いて… おかしくなっちゃう…」
グッポグッポ音を鳴らしながら何度も往復をさせる
時には小刻みに速く、そして大きくゆっくりと出し入れしたり
色々な刺激を巨クリ全体へと伝えてあげる

「あっ！ それっ… いいです… あうううっ！」

「も、もう… ダメかもっ！ ああっ… あああっ！」

彼女の高まりに合わせて、こちらも速度を上げて応えてあげると
効果よく、ブルブルブルとお尻を震わせて絶頂へと近づいていく

「あっ！ ああっ！ も、もう無理いっつ……」
「気持ちいいのお！ いくっ……イっ……」

(チュポン……)

絶頂の気配と判断して、ギリギリの所でホールを抜いてしまう

「あっ……あ……」

始めは何をされたのか理解できなかったのだろう

寸断された快感に戸惑いを見せ、お互いの顔を見合わせるが

しばらく時をおいて、何事も無かったかのように責めを再開させる

それからは、絶頂近くまで巨クリを責められては、イけずに止められる

「ダメっ！ 今度こそ……イクっ…… イっちやうっ！」

(チュポン……)

繰り返し拷問のような絶頂ギリギリの快感だけを味あわせてあげる

そんな事を何度もしつこく重ねていき、彼女の巨クリを虐めていくと
5回目の寸止めを終えたぐらいで、彼女もどうやら限界らしく
言葉には出さないが、潤んだ瞳でこちらに懇願してくる

(わかってる、もう限界でイかせてほしいんだよね)

これ以上の焦らし作業はマイナスになると考え

彼女に溜まった淫らな快楽を、そろそろ開放させようと決めた

(それじゃ、腰が抜けちゃうぐらいの絶頂を味あわせてあげるね)

「それでは、十分に磨き上げられたので、最後の仕上げに入りますね」

荒い息遣いのままグツタリと倒れ込んでいる彼女のブラに手を伸ばすと
そのままはぎ取ってしまい、すでにズブ濡れのショーツも
横に大きくずらして、彼女の秘所を完全な丸出しにさせる



無言のままピンポイントローターにスイッチを入れると
弱り切った巨クリへと、ゆっくり近づけていく

「これから、お客様の最も弱いと思われる場所にコレを
付け続けますので、どうぞ存分に気をやってくださいませ
もう、私の方で止める事はいたしませんので…」

言葉の意味と、これからされるであろう事を理解したのか
食い入るようにローターと自分の巨クリを見つめる

(さっきのコレ、凄く気に入ったみたいだしね)

最後の焦らしとばかりに、ソロリと近づけて期待を高めていく

「あっ…そ、そこなの…ああっ…」

理解したのだろう、これから巨クリで最も弱い個所を責められる事に

「うわあああああつ！」

悲鳴とも歓喜とも取れる彼女の叫びが、室内に鳴り響いた

「そ、そこおおっ！ あああああつ！」


(やっぱりココが一番好きなんだね)

上下に動きながらビクビク痙攣する巨クリを逃がさないよう
ピッタリと弱点にローターを押し付けて見守り続ける

どれぐらいの快樂なのか、自分では感じる事はできないが

彼女がどれほど待ち望んで、この最高の刺激を受けているのかは
この淫らな姿を見れば、一目瞭然だろう

(散々、焦らして我慢させたからね、気持ちいいでしょ?)



仰け反ったまま悶えている彼女を抱き起こすと
責められ続けている巨クリがすっかり見えるよう固定する
「どうです、やっぱりココが一番気持ちいいですか？」
「は、はいっ！凄くいいですっ！」

拘束され大きく動く事ができないながらも懸命に腰を浮かせ
自ら巨クリをローターへと付けて振動を楽しむ

「この上側のカリと根本の間でいつもされてるんですね」

どうやら想像した通り、いつも自分で楽しむ時はそうしてたのだから
お試しの時は、この反りの大きい返し部分がとても反応良かった
答え合わせが終わると、もう一段階振動のスイッチを上げて見守った

「はあ…はあ…はあ…む、無理いらっ…」

「こ、こんなに気持ちいい我慢できないいらっ！」

「我慢せず、好きなタイミングでどうぞ」

さらにローターを押し付けると、彼女も高く巨クリを突き出して
見ても分かるぐらいに上下へと脈動して震えていた

「いくっ…いくっ！わ、私っ…もうっ…」

膣内の収縮が強くなったのか、本気の汁がドバッと溢れてきた

ガタガタガタっとお尻と太腿が小刻みな痙攣を始め

大きく呼吸を乱すのを、立派な両乳の揺れから見て取れた

(もうこんな姿を見れる機会、無いかもしれないんだから)

すっかり目に焼き付けようと心に決めて、彼女の絶頂を迎えた

「うあああっ… いいっ… イくっ… あっ、ああああっ！」
「いいくうううううっ！」

(ヒクヒクヒクヒクヒクヒク…)
(ビクンッ！ビクンッ！ビクンッ…)

まるでパレードでも始まったかのように、巨クリが大きく脈動し
愛液の粒をまき散らしながら、膣口がパクパクと開閉を繰り返し
可愛いお尻がブルブルと震え続けている

「あっ！ あああ！ イって… んあああっ！」

止まらない刺激に、未だに続く深い快感に酔いしれながら
トロンとした表情のまま絶頂中の巨クリを愛おしそうに眺めている
いつまでも楽しんでもらいたく思い、責めるのを止めなかった





「ああっ… まだイってるう… すごっ… 気持ちいいよお…」
深イキを楽しみながら、巨クリをローターから離さない姿を見て
(女の子の性欲って、す、凄い…)
思わず関心してしまう程の乱れっぷりに、感動してしまった
ようやく痙攣も治まってきて、十分満足したかなと思った矢先
「あっ！ あっ！ あああああっ！ な、何コレええっ！
もっと凄いの、凄いの来ちゃううっ！」

やたら艶のある色っぽい喘ぎ声と共に、さらに下半身を大きく揺らし
瞬く間に全身から汗が滲み出ると、一瞬ピタツと止まった束の間


「わあああああああっ！！！！」
(プシヤアアアアアッ！！)

体を大きく反り返し、勢いよく潮を噴き出してしまった

(またイってる、絶頂中にいったのか…)
あまりの衝撃に見惚れながら、震える手でローターを懸命に支える
「こ、壊れちゃったああ…はううっ…わ、私のクリいい…
ずっとイってるうっ…大きいの…と、止まらないのおっ…」
二度目の激しい絶頂に歓喜の声を上げ、全身に余韻を味わいながら
長く続いた潮吹きが止まると、力が抜ける様にぐったりと肉体が
ベットへと静まり、そのまま気絶してしまった

「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

性欲が我慢できなかったのだろう、気がつかないうちに空いた手で
自分も股間を弄っていたらしく、パンツの中がヤバイ事態になってる
(耐えられなかった、気絶してくれて助かった…)



着替えを終えて戻ってくると、恥ずかしそうに彼女が起きていた
自分も爆発させてしまった後ろめたさから、思わずドキッとしてしまう
「お、起きられましたか、よかったです
着替えが必要になってしまった為、席を外させていただきます」
「あっ… すっ、すいませんでした…
私の、その… かかってしまいましたか？」
どうやら潮で汚してしまったと勘違いしたらしい

「大丈夫ですよ、それよりも終了時間ですので、ご帰宅の準備を…」
「そ、そんな… もう少しだけ、お願いしたいんです…」
時間の延長とか… 可能なのでしょうか？」
「えええええっ！」